獣医のカルテ ㊺

意図しない産卵防ぐ

雌鳥の卵詰まり

吉田動物病院（射水市小島）
井出 いづみ

卵詰まり（卵塞症）は、おなかの中に卵があるのに産卵できない状態で、雌鳥の病気の中でも緊急性が高く、生命に危険を及ぼす可能性があるため早急な対応や治療が必要です。一般的な症状は、カゴの隅でうずくまり何度もイキんでいるのに産卵しない様子ですが、おなかに卵があるかどうかは羽毛に隠れて分かりにくいため、雌鳥が羽を膨らませ元気や食欲がなくぐったりしている時は卵詰まりを疑う必要があります。

自宅で雌鳥にこのような症状が見られた場合は、まずはできるだけ安静にし、カゴ内の温度を約30度に保温します。それでも産卵しない、元気や食欲が回復しない時は早めに病院に連れて行きましょう。

原因は産道が緩まない、卵管が収縮しない、過産卵やカルシウム不足による低カルシウム血症、卵の形成異常、初産もしくは老齢、寒冷によるストレスなどさまざまです。

圧迫排卵処置後の様子

病院では治療として、指で卵を圧迫して押し出す圧迫排卵処置や、開腹手術によって卵を取り出す外科的処置を行います。おなかの卵によって呼吸が圧迫され呼吸困難を起こしている時は酸素吸入を行い、低カルシウム血症を疑う虚脱（全身の力が入らない）状態の時はカルシウム剤も投与します。

卵詰まりを起こさないようにするためには、日頃の予防が大切です。卵殻の成分となるカルシウムの補給は必須です。ヒエやアワなどのシード食主体の場合はボレー粉やカトルボーン、サプリメントなどを加えたり、総合栄養食であるペレットを試したりするのも有効です。

より重要な予防は、そもそも産卵につながる発情をさせないことです。雌鳥は意図的に発情や産卵をしているわけではありません。発情しやすい環境下で飼育されることで、意図しない発情や産卵を繰り返していることが多いのです。主な要因は制限のない豊富な食餌環境や肥満です。野鳥と異なり、安全で常に餌がある環境は飼い鳥にとって快適である半面いつでも発情や産卵のしやすい環境といえるのです。

愛鳥のために適切な量と栄養バランスの取れた餌を与え、日頃から体重測定などの体調管理を行い、発情や産卵によるストレスやリスクの少ない生活環境を整えてあげましょう。

次回は2月1日に掲載

2024（令和6）年12月7日
北日本新聞